

2-1 浦和駅周辺地区の位置付け・役割

本市の上位計画である「総合振興計画」及び「都市計画マスタープラン」より、浦和駅周辺地区の位置付けや役割を整理しました。

(1) 本市の将来都市像・将来都市構造

「総合振興計画」では、本市が目指すべき将来都市像として、「上質な生活都市」と「東日本の中核都市」の2つを示しています。

また、将来都市構造において、浦和駅周辺地区及び大宮駅周辺・さいたま新都心周辺地区を本市の顔となる「都心」、「中心市街地」に位置付けています。

【将来都市像1】 上質な生活都市	【将来都市像2】 東日本の中核都市
<p>都市部に住みながらも豊かな水と緑を身近に感じることで、快適さとゆとりを同時に楽しみながら、生き生きと健康で安心して暮らせる新しいライフスタイルを生み出すことで、全ての人があわせを実感し、自らが暮らすまちに誇りを感じることができる都市。</p>	<p>東日本全体の活性化をけん引する中核都市として、国内外からヒト・モノ・情報呼び込み、新たな地域産業や市民活動等の多様なイノベーションを生み出すことで、市民や企業から選ばれ、訪れる人を惹きつける魅力にあふれる都市。</p>

図 さいたま市の将来都市像と都市づくりの方向性 [資料：総合振興計画]

さいたま市の「都心」と「中心市街地」
<p>【都心】 本市の顔として、良好な住環境に配慮しつつ、幹線道路網や公共交通機関の利便性を生かしながら、商業・業務機能等の高次な都市機能を集積し、広域的な都市活動や市民生活の拠点としての役割を担います。</p> <p>【中心市街地】 都心を包含する区域を「中心市街地」と位置付け、都心間の連携の強化、広域的な都市機能と都市型住宅を誘導するとともに、新たな産業の振興、多様な人々の交流の活性化を図る拠点としての役割を担います。</p>

図 さいたま市の都心と中心市街地の位置付け [資料：総合振興計画]

(2) 浦和駅周辺地区の位置付け

「総合振興計画」では、浦和駅周辺地区について、『商業・業務機能や文化機能を中心とした機能の集積を図り、都心としての形成』や『駅周辺における商業機能・文化機能等の集積強化・再形成や回遊性の向上などによるにぎわいの創出』、『歴史文化資源や「県都」「文教都市」といったイメージを生かした“洗練された伝統と感性豊かな文化が息づく、風格で魅了する都心地区”の形成』を目指すことを位置付けています。

さいたま市の「都心」

大宮駅周辺・さいたま新都心周辺地区	浦和駅周辺地区
<p>大宮駅周辺地区においては、広域的な商業・業務機能や交流機能、さいたま新都心周辺地区では広域行政機能、業務機能、文化機能、交流機能等の機能集積を進め、両地区の連携を深めつつ一体的な都心としての形成を進めます。</p> <p>また、東日本、ひいては国際社会との交流のための結節点となる東日本の対流拠点としての役割を果たし、“ヒト・モノ・情報が集まり、新たな価値を生み出す都心地区”の形成を目指します。</p>	<p>行政機能を担うとともに、商業・業務機能や文化機能を中心とした機能の集積を図り、都心としての形成を進めます。</p> <p>また、駅周辺における商業機能・文化機能等の集積強化・再形成や回遊性の向上などによるにぎわいの創出と、歴史文化資源や「県都」「文教都市」といったイメージを生かした、“洗練された伝統と感性豊かな文化が息づく、風格で魅了する都心地区”の形成を目指します。</p>

図 都心の位置付け [資料：総合振興計画]

また、「都市計画マスタープラン」では、浦和駅周辺地区について、『幹線道路網や公共交通機関の利便性を生かし、多様で高次な都市機能の充実・強化を図るため、都市機能の更新と土地の合理的かつ健全な高度利用の推進を図ること』や『良好な住環境や都市景観を形成するための規制誘導手法を必要に応じて活用すること』のほか、2つの都心をつなぐ「中心市街地」として、『都心を結ぶ交通網の整備や一体的な土地利用の誘導などにより、都心間の連携強化と高次都市機能の集積を誘導するとともに、新しい産業の振興、多様な人々の交流の活性化を図る拠点づくりを進めること』を位置付けています。

浦和駅周辺地区

【目標像】

行政機能、多彩な商業機能や文化・交流機能が集積し、各機能が快適な歩行者空間ネットワークとみどりのネットワークで結ばれた都心の形成を目指します。

【まちづくりの方向性】

- 県及び市の行政施設の集積や文化交流施設の立地を生かし、商業業務機能、文化・交流機能、都心居住機能を充実させ、各機能のバランスのとれた都心を形成します。
- 都心居住としての住環境の確保を図ります。
- 鉄道高架化により市街地の分断が解消されたことを生かし、東西方向の道路の整備を進めるとともに、駅東西の機能集積を強化し、にぎわいや回遊性を高める市街地の再構築を推進します。
- 中山道沿道などの歴史文化資源を生かしたまちづくりや県庁通りの道路環境整備などを推進し、風格のある景観形成を図ります。

図 浦和駅周辺地区の目標像・まちづくりの方向性 [資料：都市計画マスタープラン]

(3) 浦和駅周辺地区のまちづくりの必要性

コンパクト＋ネットワーク型の都市構造の実現と人口減少・超高齢時代の到来に向けて、今後は“選択と集中”の視点のもと、限りある資源や資産を適正に配分、有効に活用し、効率的で持続可能なまちづくりにつなげていくことが求められます。

浦和駅周辺地区は、古くからの中心市街地として、多くの市民や就労者、来街者の生活・活動・交流を生み出す場であり、同地区のまちづくりを推進することは、多くのまちの利用者にとってメリット（整備効果・投資効果）があり、本市が目指す将来都市像（上質な生活都市・東日本の中枢都市）の実現に大きく寄与するものであると考えられます。

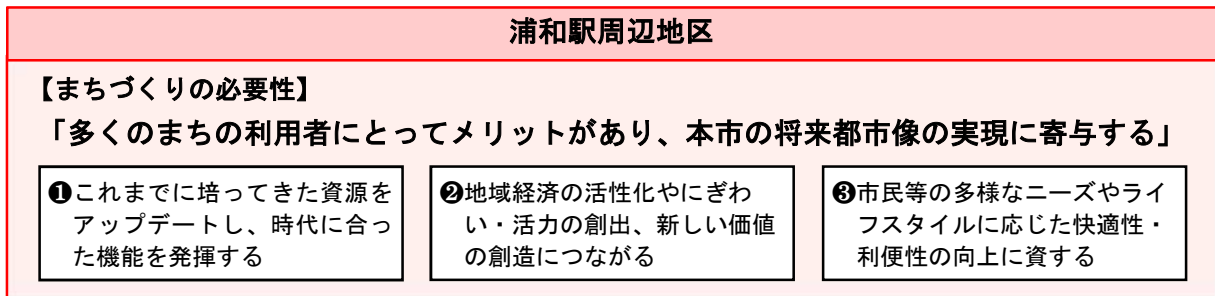


図 浦和駅周辺地区のまちづくりの必要性

2-2 まちの将来展望

まちの将来展望として、社会情勢の変化やそれに伴う価値観の変化、将来を見据えて浦和のまちが重視すべきものについて整理しました。

(1) 浦和を取り巻く社会情勢の変化

浦和駅周辺のまちづくりの検討にあたり、注視すべき社会情勢として、以下の事項が挙げられます。

①持続可能な開発目標（SDGs）

SDGsは、平成27（2015）年9月の国連サミットで採択された令和12（2030）年までの長期的な開発の指針「持続可能な開発のための2030アジェンダ」における「持続可能な開発目標」であり、国際社会共通の目標として持続可能な世界を実現するための17の目標と169のターゲットから構成されています。

本市は「SDGs未来都市」に選定されており、地球上の「誰一人として取り残されない」社会の実現に向けて、経済、社会、環境をめぐる広範な課題に対する総合的な取組を推進しています。



図 持続可能な開発目標（SDGs）

[資料：SDGsのポスター・ロゴ・アイコンおよびガイドライン（国際連合広報センター）]

②本格的な人口減少・超高齢時代の到来

我が国の総人口は、長期的な人口減少過程に入っており、今後も人口減少が加速度的に進行するものと推計されています。加えて、少子高齢化の進行は著しく、既に超高齢社会を迎えており、今後もその傾向は続いていくものと推計されています。

本市では、近年も人口が増加傾向にありますが、将来的な人口減少・超高齢時代の到来に備え、コンパクト+ネットワーク型の都市構造への転換を図ります。

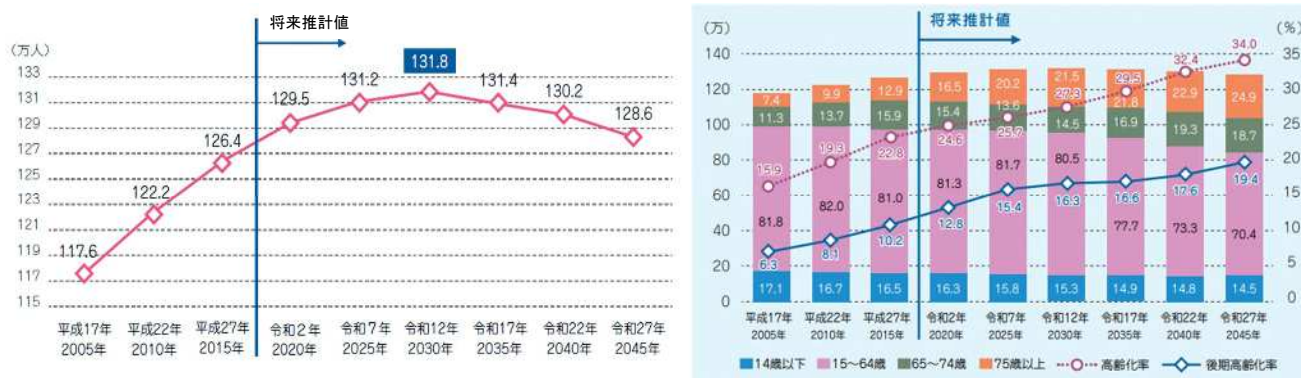


図 さいたま市の総人口・年齢4区分別人口の見通し [資料：総合振興計画]

③経済のグローバル化と都市間競争の激化

経済の急速なグローバル化の進展などの要因により、我が国の経済の先行きに不透明感が増す中、都市間競争は更に激化することが予想され、産業特性を生かしながら地域経済の活性化や経済活動の更なる国際化の推進が求められています。

また、新型コロナウイルス感染症の流行により落ち込みを見せていた景気動向も回復傾向を示しているとともに、テレワーク等のICTを用いた柔軟な働き方が急速に普及し、ライフスタイルの多様化が進んでいるほか、先端技術の進捗により、産業構造の大きな転換や労働環境の変化が予測されています。

本市においては、恵まれた立地環境を生かし、地域の雇用や経済を支える中小企業者の経営基盤強化や多様な人材の確保・育成に向けた支援を推進する必要があり、地域商業の活性化や産学官金連携によるイノベーション創出や海外展開、生産性向上に向けた企業支援、ニーズに応じた就労支援の充実などの取組を進めています。

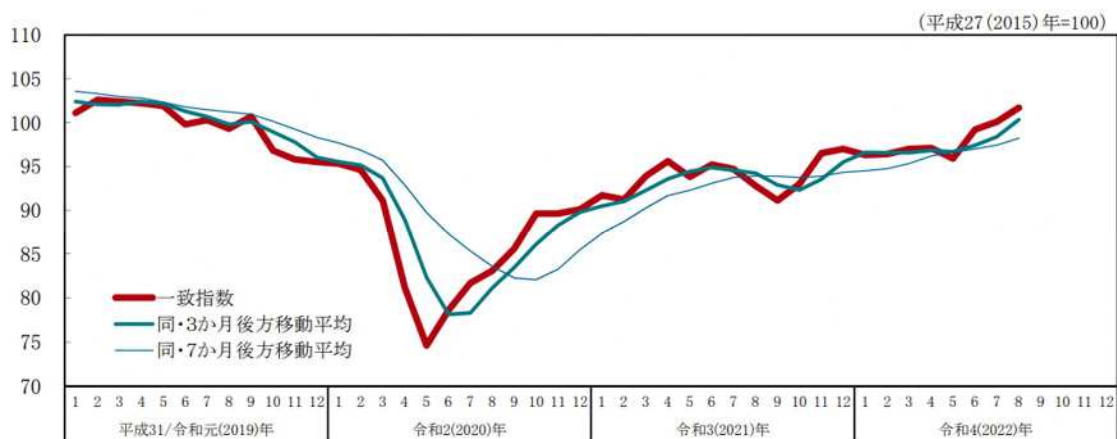


図 C I（景気動向指数（一致指数））の動向

[資料：景気動向指数 令和4（2022）年8月分速報（内閣府）]

④安全・安心に対する意識の変化

令和元年東日本台風（台風第19号）や関東・東北豪雨、熊本地震など、東日本大震災以後にも大きな自然災害が発生し続けており、首都直下地震など巨大地震発生の切迫性に加え、近年多発する局地的な豪雨などに対する備えを十分に進める必要があります。

東日本大震災を契機として、我が国における国民の防災意識は高まりを見せており、災害に対する備えのみならず、環境・エネルギーや人と人とのつながりの大切さなどが重視されています。

本市では、ハード・ソフト両面からより一層総合的かつ計画的に災害に強いまちづくりを推進しています。

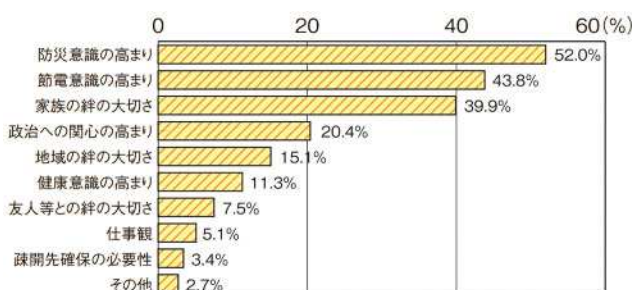


図 東日本大震災後の考え方の変化

[資料：国土交通白書 2012（国土交通省）
（国民意識調査（平成24（2012）年1月末～2月実施））]

⑤社会の多様性と市民協働・公民連携の高まり

家族形態や就労形態の変化とともに、人々のライフスタイルや価値観が多様化しています。

行政計画の策定や事業の実施に関する「市民参加」をはじめ、市民と行政が対等の立場に立ち、お互いを尊重しながら取組を推進する「市民協働」、NPOや大学、事業者等と行政が同一の方向性に向けてノウハウや資金等を拠出しながら、行政サービスの向上や事業の効率化を図る「PPP」によるまちづくりが全国各地で進められており、本市も地域共生社会の実現に向けて取組を展開しています。



図 PFI 事業の実施状況／分野別事業件数

[資料：令和2（2020）年11月17日 第23回 PPP/PFI 検討会 配付資料（内閣府）]

⑥急速に進化する情報社会

ICTの進展は目覚ましく、特にインターネットやスマートフォンなどを中心とした情報通信技術の普及・革新は、SNSなどコミュニケーション手段の多様化と合わせて、人々の生活や文化、社会経済の仕組みを変革してきたと言えます。さらに、IoTにより、様々なヒト・モノ・組織が瞬時にネットワークにつながり、日々新たな価値が生み出されています。

このようなデジタル化を更に推し進めた「超スマート社会（Society5.0）」の実現に向けた取組は、我が国が目指すべき未来社会の姿として提唱されており、本市は「スマートシティさいたまモデル」を推進しています。

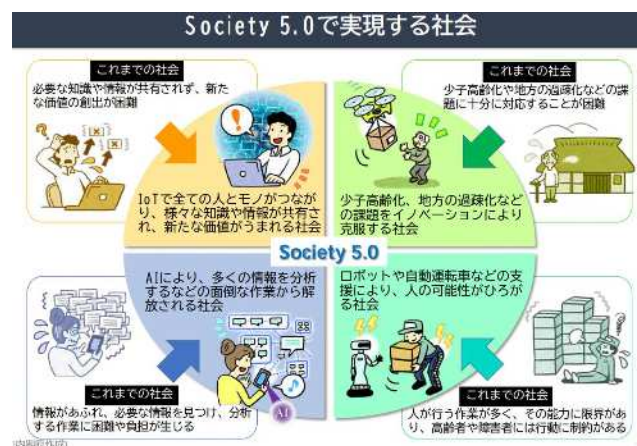


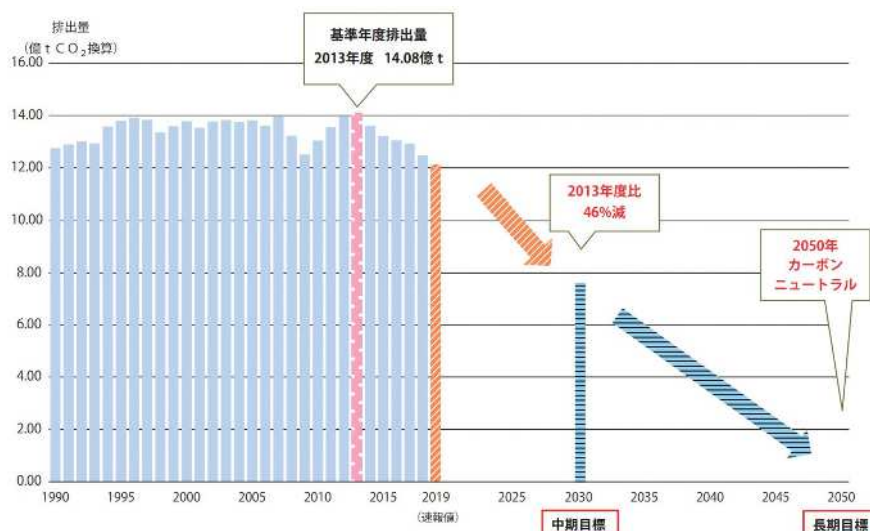
図 Society5.0で実現する社会のイメージ

[資料：Society 5.0「科学技術イノベーションが拓く新たな社会」説明資料（内閣府）]

⑦地球規模での環境問題の深刻化

地球規模での人口増加や経済活動が拡大する中で、地球環境への負荷はますます増大し、地球温暖化、生物多様性の損失、プラスチックごみによる海洋汚染など環境問題は多様化しています。

特に、地球温暖化は、人類の生存基盤に関わる安全保障の問題と認識されており、温室効果ガスを削減し、脱炭素社会を実現することは人類共通の課題であることから、本市は、令和32（2050）年に二酸化炭素排出実質ゼロを達成する「ゼロカーボンシティ」の実現を目指すことを表明しました。



資料）環境省データより国土交通省作成

図 我が国の温室効果ガス中期目標と長期目標

〔資料：国土交通白書 2021（国土交通省）〕

⑧居心地が良く歩きたくなるまちなかの推進

新型コロナウイルス感染症の影響により、満員電車や都心のオフィスの過密化などの課題が改めて顕在化し、テレワークの導入や公園等のオープンスペースの価値の再評価など、これまでの都市における働き方や住まい方を問い直すことが求められています。

国の発表によれば、都市に人や機能等を集積させることの必要性に変わりなく、国際競争力強化やウォーカブルなまちづくり、コンパクトシティ、スマートシティの推進は引き続き重要であり、都市政策の推進にあたっては、新型コロナウイルス感染症の影響により生じた社会の変化に柔軟に対応していくことが必要とされています。

本市では、「ウォーカブル推進都市」に賛同し、居心地が良く歩きたくなるまちなかの形成に取り組んでいます。



図 ウォーカブルなまちのイメージ

〔資料：ウォーカブル推進都市〕募集
記者発表資料（国土交通省）〕

(2) 変化する価値観

時代の変化や技術革新等によって「ひと」と「まち」はどう変わるのか、想定される変化について整理しました。

「意識・考え方」の変化 ～固有の魅力・個性・特色が重視される～

技術革新によりヒト・モノ・情報の「つながり方・関わり方」が変わり、様々な煩わしさが解消され、より豊かで端的で容易でスマートな生活に近づいていくと考えられます。

つまり、いま「便利になったな／こんなことできたら便利」と感じるのが、未来では「当たり前」になっているということです。

あらゆるものがスマートになり、共有されることで、多すぎる情報の中から認識されるために、固有の魅力・個性などの“特色”となるものがより一層重視されるようになり、人々はその“特色”を見て選択の判断をするようになると考えられます。

「ひと」の意識・考え方の変化	「まち」の環境の変化
<p data-bbox="245 952 716 987">“感性”や“想像力”が財産になる</p> <p data-bbox="193 999 767 1149">人の活動の一部がAIやロボットに代替されるようになり、「経験」や「技術」がなくても、一定の製品・サービスを生み出すことが可能となります。</p> <p data-bbox="193 1162 767 1312">それに伴い、「感性」「想像力」など人の感受性を持って補う必要がある「芸術」や「教育」の分野において、人の活躍が顕著になると考えられます。</p> <p data-bbox="193 1326 767 1440">また、デジタル技術が普及する一方、リアルでの体験や交流、ひとのつながりは、今後更に重要になると考えられます。</p>	<p data-bbox="911 952 1299 987">まちなかにゆとりが生まれる</p> <p data-bbox="818 999 1393 1189">インターネット上のマッチング・プラットフォームを介して他の人と資産を共有する「シェアリングエコノミー」が加速することで、世界中のニーズを満たすために世界中のリソースが動き、過剰消費・所有の必要がなくなります。</p> <p data-bbox="818 1202 1393 1317">それにより、資源の有効活用、省エネルギーが促進され、環境にやさしくサステナブルな社会になると考えられます。</p> <p data-bbox="818 1330 1393 1480">また、自動運転やMaaSの発展に伴い移動の効率化が図られることで、道路空間の縮小や滞留空間の確保が可能となり、人中心のまちづくりが今よりも主流になると考えられます。</p>

(3) 将来を見据えて浦和のまちが重視すべきもの

本ビジョン策定にあたり、将来を見据えて「浦和のまちが重視すべきもの」について、有識者の方々にご意見をいただきました。

①強みを伸ばすグローバルな視点

経済のグローバル化の中で、まちの発展には浦和の個性が重要です。

浦和の強みである文化・教育やサッカーを持続的に発展させていくためには、世界に視野を広げ、人生100年時代の学びの場や、文化・教育の発信拠点として、新たな文教都市の魅力を創造していく必要があります。

また、浦和のまちの個性を生かすには、ヒューマンスケールやまちの統一感につながるデザインコードなど、デザインの考え方を取り入れていくことが必要です。

社会の変化に応じて、浦和のまちの住みやすさを維持し続けるためには、新技术を積極的に活用しながら、まちで活発な交流や活動が生み出される持続可能な経済のシステムを構築していくことが求められています。

②非常時の機能維持

県庁が位置する浦和駅周辺のまちは、周辺住民の避難場所としてだけでなく、大規模災害に対応する県の拠点施設等で、広域的なオペレーションをする場となります。今後も起こり得る世界的感染症の流行や大規模災害の発生等の様々な非常時にも、市民の安全や安心を確保しながら、広域的な活動の拠点として中枢機能を維持する必要があります。

また、洪水による災害時には、台地である浦和駅周辺に周辺地域から多くの人々が避難してくることが想定され、外からの避難者も受け入れることができる機能や設備等の環境を備える必要があります。

このことから、浦和駅周辺のまちは、非常時にも市域を超えて地域社会に貢献することができる強靱性（レジリエンス）を備えることが求められています。

③浦和が誇るプライドと多様性

地域に根付いたサッカーファンや市民のシビックプライド、浦和ブランドなどの熱い思いや意識の高さは、浦和が全国に誇るまちの特長となっています。

地域の熱い思いやまちの個性を引き継いで、共に楽しみ、支え合えるようなコミュニティが形成されるには、まちを通じて新旧住民や幅広い世代間など、多様な人と人がつながる場や機会が重要です。

④将来に向けたスマートなまち・ひと

現在、本格的な人口減少・超高齢化社会の到来、急速に進化する情報化社会、地球規模での環境問題の深刻化、自動車中心から人中心のまちづくりへの変化など、様々な課題が顕在化しつつあり、まちづくりの転機に立っています。

これらの課題に対応するためには、浦和のまちの特性を踏まえたうえで、新たなモビリティやライフスタイル等の変化を受け入れ、新技術の導入や脱炭素化したスマートなまち・ひとのあり方を検討していく必要があります。

また、Society5.0の社会には、都市のデジタルツインを実装することが重要です。リアルなまち（フィジカル空間）が非常時でも、サイバー空間では様々な活動を行うことができます。また、サイバー空間は、世界中のヒト・モノ・情報が容易にアクセスでき、浦和のまちの活性化につながると考えられます。

これらの実現には、まちのデジタルトランスフォーメーション（DX）を推進していく必要があります。

⑤心を動かす路地性・境界性

浦和のまちには、中山道浦和宿や県都としての発展等の歴史から、伝統ある落ち着いたまち並みが形成されています。

また、文化資源等のような地域の宝と、これらをつなげる気持ちの良い勾配の坂、並木のように人に近い距離で感じられる自然、そして、商業も栄え、文化も花開くような、歩いて楽しい要素が多くあります。

これらの地域資源は守りつつ、開発と保全の両立・調和を図り、まちに面白さや新たな発見をもたらしてくれる路地性・境界性を生かした、ウォークアブルなストリート形成が重要です。その中でも、駅周辺は、地区の顔となる重要な拠点であることから、社会の変化に合わせて再構築（リ・デザイン）していく必要があります。

浦和のまちの宝を、未来へ、様々な活動へとつなげていくことが非常に重要です。そのため、人や建物が多いことが立派なまちではなく、地域の魅力である別所沼公園などの自然豊かな憩いの場や空間、玉蔵院をはじめとする歴史的・文化的資産など、文化とまちの融合を図っていく必要があります。